

2026. 2. 22 (日) マタイ27:11~26

27:11 さて、イエスは総督の前に立たれた。総督はイエスに尋ねた。「あなたはユダヤ人の王なのか。」イエスは言われた。「あなたがそう言っています。」

27:12 しかし、祭司長たちや長老たちが訴えている間は、何もお答えにならなかった。

27:13 そのとき、ピラトはイエスに言った。「あんなにも、あなたに不利な証言をしているのが聞こえないのか。」

27:14 それでもイエスは、どのような訴えに対しても一言もお答えにならなかった。それには総督も非常に驚いた。

27:15 ところで、総督は祭りのたびに、群衆のため彼らが望む囚人を一人釈放することになっていた。

27:16 そのころ、バラバ・イエスという、名の知れた囚人が捕らえられていた。

27:17 それで、人々が集まったとき、ピラトは言った。「おまえたちはだれを釈放してほしいのか。バラバ・イエスか、それともキリストと呼ばれているイエスか。」

27:18 ピラトは、彼らがねたみからイエスを引き渡したことを知っていたのである。

27:19 ピラトが裁判の席に着いているときに、彼の妻が彼のもとに人を遣わして言った。「あの正しい人と関わらないでください。あの人のことで、私は今日、夢でたいへん苦しい目にあいましたから。」

27:20 しかし祭司長たちと長老たちは、バラバの釈放を要求してイエスは殺すよう、群衆を説得した。

27:21 総督は彼らに言った。「おまえたちは二人のうちどちらを釈放してほしいのか。」彼らは言った。「バラバだ。」

27:22 ピラトは彼らに言った。「では、キリストと呼ばれているイエスを私はどのようにしようか。」彼らはみな言った。「十字架につけろ。」

27:23 ピラトは言った。「あの人がどんな悪いことをしたのか。」しかし、彼らはますます激しく叫び続けた。「十字架につけろ。」

27:24 ピラトは、語ることが何の役にも立たず、かえって暴動になりそうなを見て、水を取り、群衆の目の前で手を洗って言った。「この人の血について私には責任がない。おまえたちで始末するがよい。」

27:25 すると、民はみな答えた。「その人の血は私たちや私たちの子どもらの上に。」

27:26 そこでピラトは彼らのためにバラバを釈放し、イエスはむちで打ってから、十字架につけるために引き渡した。

<説教>

今年のお難節に入っています。本日朗読された箇所には、主イエス・キリストが総督ピラトによる裁判を受けたときの様子が記されています。総督ピラトとは、私たちが使徒信条によって「主は…ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ」と告白している、あのピラトのことです。

イエスが十字架につけられる金曜日の〈夜が明けると、祭司長たちと民の長老たちは全員で、イエスを死刑にするために協議し〉ました(27:1)。〈そしてイエスを縛って連れ出

し、総督ピラトに引き渡し)ました(2)。こうして〈イエスは総督の前に立たれ)ました(11)。こうして総督ピラトによるイエスの裁判が始まりました。

「あなたはユダヤ人の王なのか。」とピラトはイエスに尋ねました。それは、ルカが記しているように、祭司長たちと民の長老たちが、「この者はわが民を惑わし、カエサルに税金を納めることを禁じ、自分は王キリストだと言っていることが分かりました。」と言ってイエスを訴えたからです(ルカ 23:2)。それに対してイエスは、「あなたがそう言っています。」とお答えになりました。「あなたがそう言っています。」とは直訳です。第3版とか口語訳では「そのとおりです」「そのとおりである」と訳されていますが、内容的にはそういうことです。こうしてイエスはご自分が「ユダヤ人の王である」ことをはっきりとお認めになりました。イエスはローマ帝国カエサルに反逆する者ではありませんでした。しかしイエスは確かに、本当にユダヤ人が信じ、聞き従うべき「ユダヤ人の王」でした。そして、ユダヤ人だけの王ではなく、私たち全人類の、全世界の、全宇宙の、全被造物の王であります。またヨハネの福音書に記されているように、「事実、わたしの国はこの世のものではありません。」ともイエスはピラトに言われました(ヨハネ 18:36)。イエスが王であるということは、ローマ皇帝などのこの世の王と同列の王ではありません。イエスだけが私たちの外面も内面も、からだも心も永遠に御支配なさる、御支配する権利をお持ちの王です。この世の王をも支配し、その遙か上におられる王です。悪魔と罪に打ち勝ち、私たちに本当の、永遠の幸せをもたらしてくださる王なのです。

このようにイエスは、「あなたはユダヤ人の王なのか」というピラトの問いに対しては、そのとおりだとはっきりとお答えになりました。しかし、祭司長たちや長老たちが訴えている間は、何もお答えになりませんでした(12)。つまり、裁判では普通の、訴えられた側がするはずの弁明を一切しませんでした。それで不思議に思ったピラトがイエスに「あんなにも、あなたに不利な証言をしているのが聞こえないのか。」と言いました(13)。それでもイエスは、どのような訴えに対しても一言もお答えになりませんでした(14)。何故か、〈不利な証言〉(それはすべて「偽証」でしたので)にいちいち弁明する意味も無い、ということもあったかもしれません。しかし他の(もっと大事な)理由が考えられます。被告人が弁明をすれば今度はその真偽を確かめる必要があり、訴える側との多くのやりとりが必要となってしまい、判決の出るのが遅れてしまいます。しかし、イエスはご自分が十字架につけられて死ぬのは今日この日、すなわち「過越の小羊を屠る日」でなければならぬことを知っておられました。「ご自分の血をもってその民を神のさばきから救う真の過越の小羊」、〈世の罪を取り除く神の子羊〉(ヨハネ 1:29)としてご自分をこの世にお遣わしになった父なる神のみこころに完全に従い、行う。それが、イエスが全く弁明をしなかった理由と考えるべきです。そのようにイエスは「弁明」は一言もしませんでした。ご自分が「ユダヤ人の王である」とはっきりと宣言、告白なさいました。総督が〈非常に驚いた〉(14)のは、イエスが弁明しないことの不思議さ以上に、そこにイエスの王としての威厳を見た、圧倒されたということを見なければなりません。

ピラトには「イエスには訴えられているような罪はない。無罪である。」と分かりました。そして祭司長たち、民の長老たちがねたみからイエスを自分に引き渡したことを知っていました(18)。それでピラトは、〈祭りのたびに、群衆のため彼らが望む囚人を一人釈放することにしてきた〉(15)という慣例を利用して「上手に」イエスを釈放しようと考え

ました(17)。それは被告人(イエス)のためでも、裁判で正義を貫くためでもなく、自分の今の地位を保とうという保身のためでした。〈暴動で人殺しをした暴徒たちとともに牢につながれていた〉(マルコ 15:7)バラバ・イエス(16)を引き合いに出せば人々は〈キリストと呼ばれているイエス〉(17)の方を釈放するように願うとピラトは考えました。そうやって穏便にことを済まそうとしました。更に妻からの願いがあり(19)、ますますこの裁判を早く終わらせたいということになりました。

しかし、ことはピラトの考え通りにはなりません。バラバの釈放を要求してイエスは殺すよう、祭司長たちと長老たちから説得された群衆(20)は、バラバの釈放をピラトに求め(21)、イエスを「十字架につける」と激しく叫び要求し続けました(23)。ピラトは「キリストと呼ばれているイエス」と言ってイエスがキリストであることを二度も群衆に突き付けました(17,22)。しかしこのとき群衆はキリスト・イエスを拒み、イエスが血を流して十字架で死ぬことの責任を自分や子どもたちまでも負うと豪語したのです(25)。ピラトはとにかく暴動になって自分の責任が追及されることを避けようとしたのでした(24)。〈ピラトは彼らのためにバラバを釈放し、イエスはむちで打ってから、十字架につけるために引き渡し)ました(26)。

総督ピラトの法廷に立たれたイエスが、ピラトの前でご自分がユダヤ人の王であるとはっきりと宣言、告白なさったこと。ピラトがイエスには何の罪もないと判断したこと。それでバラバと引き換えにイエスを釈放しようとしたが、逆にバラバを釈放することになってしまったこと。そして無罪としたイエスを十字架刑にするとしたこと。このような「総督ピラトの裁判」の初めから終わりを見て私たちは何を学び知るべきでしょうか。私たちはやがて自らが立つべき「神の法廷」を覚えるべきです。〈人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まって)います(ヘブル 9:27)。〈私たちはみな、善であれ悪であれ、それぞれ肉体においてした行いに応じて報いを受けるために、キリストのさばきの座の前に現れなければならないのです〉(Ⅱコリント 5:10)。もし私たちが罪の赦しを得ないままで死んでこのキリストのさばきの座に立つなら、もちろん有罪宣告を受けて永遠の滅びの刑罰を受けることとなります。しかし、私たちの罪をその身に負われて私たちのために、私たちの代わりに十字架で死なれて神の刑罰を受けてくださったキリスト・イエスを信じて罪赦されていれば、「罪人である(その意味では有罪)だけでもイエスに免じて無罪」との判決を頂くことができます。それはちょうど、キリスト・イエスがバラバ・イエスの代わりに刑罰を受け、本当は死刑にされるべきだったバラバ・イエスが釈放されることになったのと同じです。そういう限りなくあわれみ深い、恵み深い、愛に富む、そして義なる威厳ある王としてイエスは私たちを圧倒的に御支配なさるのです。